魯迅輯『古小説鉤沈』校釈
―『幽明録』（六）―

富永一登

40　漢袁安父亡①、母使安以雞酒詣卜工②、問葬地③。道逢三書生④、問安何之⑤。具以告、書生曰、「吾知好葬地⑥。」安以雞酒禮之⑦、畢、告安地處云⑧、「當葬此地⑨。世爲貴公⑩。」便與別⑪、數歩顧視⑫、皆不見⑬。安疑是神人⑭。因葬其地⑮。遂登司徒⑯、子孫昌盛、四世五公焉⑰。（廣記一百三十七、又三百八十九。續談助四（殷芸『小説』）〈出『幽明録』〉、『古小説鉤沈』本第五十四話）。亦見古今類事十七）※鄭晩晴輯注本三六頁

【校異】　①廣記三八九、續談助無「漢」字。續談助「父」下有「母」字。「亡」、古今類事作「没」。②續談助無「母」字。「雞」、廣記一三七作「鷄」、下同。「工」、廣記三八九作「貢」、古今類事作「者」。③「問」、古今類事作「求」。④「逢」、續談助作「邊」。⑤續談助無此句以下十五字。⑥古今類事作「吾能知之」。⑦古今類事無「之」字。⑧續談助無「處」字、「云」作「曰」。古今類事作「乃指一處云」。⑨校記云、「一引無此句。」廣記一三七、續談助無「葬此地」三字。古今類事作「葬此者」。⑩「世」、古小説鉤沈作「世世」二字、今據廣記改。廣記一三七、續談助「世」上有「此」字。古今類事作「當世爲上公」。⑪續談助無「便與」二字、「別」下有「行」字。古今類事作「便與安別」。⑫古今類事無此句。⑬「皆」、古今類事作「須臾」二字。⑭續談助無此句。古今類事作「安異之」。⑮古今類事作「遂葬其所占之地」。⑯「遂登」、續談助作「後果位至」四字。古今類事作「遂爲司空」。⑰「四」、全集本誤作「日」、今據手稿本・古籍叢編本改。「五」、續談助作「三」。廣記三八九無「焉」字。

※『古今類事』（『十萬卷樓叢書』所収『新編分門古今類事』）巻一七作〈袁安字邵公、汝陽人。仕東漢、永平爲司空。爲政雖號嚴明、然未曾鞫人以贓罪。嘗稱曰、「凡學仕者、高則望宰相、下則希牧守。錮人於聖世、所不忍爲也。」聞者感激自勵。初、因父没、母使安以雞酒詣卜者求葬地、

道逢三書生、問安何之。具以告、書生曰、「吾能知之。」安以雞酒爲禮、畢、乃指一處云、「葬此者、當世爲上公。」便與安別、須臾不見。安異之。遂葬其所占之地。遂爲司空、子孫昌盛、四世五公焉。見漢史及幽明録。〉

【注釈】 **袁安** 後漢の人。明帝・章帝・和帝に仕えて、元和三年（八六）に司空、章和元年（八七）に司徒となり、永元四年（九二）に卒す。後漢末の袁紹・袁術の祖、『後漢書』巻四五に伝がある。 **卜工** 占い師。『論衡』吉験篇に、「光武帝、建平元年十二月甲子、生於濟陽殿第二内中。皇考爲濟陽令。時夜無火、室内自明、皇考怪之、即召功曹史充蘭、使出問卜工。」（光武帝は、建平元年十二月甲子に、濟陽宮の後殿第二内中に生まる。皇考 濟陽令たり。時に夜 火無きに、室内自ら明るければ、皇考之を怪しみ、即ち功曹史充蘭を召し、出でて卜工に問はしむ）とある。 **神人** 神のような非凡な人。桓譚『新論』辨惑篇（『文選』巻一二郭璞「江賦」納隱淪之列眞注・巻二一顔延之「五君詠」尋山洽隱淪注・巻二七謝朓「敬亭山詩」隱淪既已託注・巻三九任昉「爲卞彬謝脩卞忠貞墓啓」隱淪惆悵注竝引）に「天下神人五、一曰神仙、二曰隱淪、三曰使鬼物、四曰先知、五曰鑄凝。」とあるが、ここでは「先知」の意であろう。 **司徒** 司空・大尉とともに後漢の三公（臣下として最高の位）の一つ。 **四世五公** 四代にわたって五人が三公の位についた。『後漢書』袁安伝によると、袁安の子の敞が司空、孫の湯が大尉、曾孫の逢が司空、逢の弟の隗が太傅（三公の一つとされた）となっている。『三國志』巻六袁紹傳に「高祖父安、爲漢司徒。自安以下四世居三公位。」という。

【訓読】 漢の袁安の父亡し、母 安をして雞酒を以て卜工に詣り、葬地を問はしむ。道に三書生に逢ふに、安に何くに之くかと問ふ。具に以て告ぐるに、書生曰く、「吾 好き葬地を知る」と。安 雞酒を以て之に禮し、畢るに、安に地處を告げて云ふ、「當に此の地に葬むるべし。世よ貴公と爲らん」と。便ち與に別れ、數歩にして顧視するに、皆見えず。安 是れ神人なるかと疑ふ。因りて其の地に葬むる。遂に司徒に登り、子孫昌盛し、四世五公たり。

【訳文】 漢の袁安の父が亡くなり、母は袁安に鶏と酒を持って占い師のところに行かせて、埋葬地を尋ねさせた。途中で三人の書生に出会ったところ、書生は袁安にどこに行くのかと尋ねた。袁安が子細を話したところ、書生は「私は良い埋葬地を知っている」と言った。そこで袁安は鶏と酒をわたして礼を行い、それが終わると、書生は袁安にその場所を告げて、「ここに葬るのがいい。そうすれば代々高貴な身分となるだろう」と言った。別れを告げて、数歩歩いて振り返ったら、書生たちの姿は見えなかった。袁安は神だったのかと思った。そこで、その場所に父を埋葬した。その後、袁安は司徒となり、

子孫は栄え、四代にわたって五人が三公の位についた。

【補説】　埋葬地を占う「卜宅」は、『禮記』雑記上に「大夫卜宅與葬日」（大夫 宅と葬日とをトす）、『孝經』喪親章に「卜其宅兆而安措之」（其の宅兆をトして之を安措す）〈御注云、「宅、墓穴也。兆、塋域也。葬事大、故卜之。」〉とあるように、葬事の儀式として行われていた。祖台之『志怪』（『御覽』巻九〇〇引、『古小説鉤沈』本第四話。『書鈔』巻九四、『御覽』巻五五九引『志怪集』にも見え、それを魯迅は『雑鬼神志怪』〈『古小説鉤沈』第一四話、校注に「亦見孔氏志怪」というのは、祖台之『志怪』の誤り〉に収録している。『晉書』巻八八周訪傳の最後にも記載されている。）にある東晉初期の将軍陶侃（二五九ー三三四）が、父の埋葬地を老人から教えてもらい子孫が繁栄する話もこの類話である。

この話は、『録異傳』（『書鈔』巻九二・九四引、『御覽』巻五五六・八五〇引、『古小説鉤沈』本第八話）、范曄『後漢書』巻四五袁安傳にも記載されている。『御覽』巻五五六・八五〇引『録異傳』には、子孫の袁術（司空袁逢の子で字は公路）の葬地にまつわる話も記す。『後漢書』巻四五袁安傳は、

初、安父沒、母使安訪求葬地。道逢三書生、問安何之。安為言其故。生乃指一處云、「葬此地、當世為上公。」須臾不見、安異之。於是遂葬其所占之地、故累世隆盛焉。

と記し、『古今類事』の文は、これによる。

殷芸『小説』（『廣記』巻一六一引、『古小説鉤沈』本第五十五話）には、袁安の至誠が神を感動させて雹の害が収まったという話も記されている。

41　陳仲擧微時①、嘗行宿主人黄申家②。申婦夜産③、仲擧不知④。夜三更、有扣門者⑤。久許、聞裏有人應云⑥、「門裏有貴人⑦、不可前。宜從後門往⑧。」俄聞、往者還、門内者問之、「見何兒⑨。名何。當幾歳⑩。」還者云、「是男兒⑪、名阿奴。當十五歳。」又問曰⑫、「後當若爲死⑬。」答曰、「爲人作屋、落地死。」仲擧聞此⑭、默志之⑮。後十五年、爲豫章太守、遣吏往問昔兒阿奴所在⑯。家云、「助東家作屋、墮棟而死矣⑰。」仲擧後果大貴⑱。（廣記一百三十七、又三百十六。⑲亦見古今類事三）※鄭晚晴輯注本九九頁

【校異】　①「陳仲擧」、校記云、「一引作陳蕃。」廣記三一六作「陳蕃」。②「嘗」、古小説鉤沈作「常」、今據廣記改。「申」、校記云、「類事作甲。」古今類事作「甲」、下同。③「申婦」、廣記一三七作「申家」、古今類事作「甲妻」。④「仲擧」、廣記三一六作「蕃」。⑤「扣」、古今類事作「叩」。⑥廣記一三七・古今類事無「裏有人」三字。⑦「裏」、古今類事作「内」。廣記三一六無「貴」字。⑧廣記三一六作「相告云從後門往」七字。古今類事無「門」字。⑨「見」、古今類事作「是」。⑩「當」下、

古今類事有「有」字。⑪廣記三一六・古今類事無「兒」字。⑫古今類事無「曰」字。⑬古今類事作「當若何死」四字。⑭「此」、古今類事作「而」。⑮「仲擧聞此、默志之」、校記云、「一引作聞而不信。」廣記三一六作「蕃聞而不信」五字。⑯「往」、廣記三一六作「征」、古今類事無此字。⑰「墮棟」、古小説鉤沈作「落地」、今廣記・古今類事皆作「墮棟」、據改。「而死矣」、廣記三一六作「亡没」二字、古今類事無「矣」字。⑱廣記三一六無此六字。⑲校記云、〈案御覽三百六十一引搜神記云、「陳仲擧微時、嘗宿黄申家、而申婦方産。有扣申門者、家人咸不知。久久方聞屋裏有言、『寶堂下有人、不可進。』扣門者相告曰、『今當從後門往。』其一人便往。有頃還、留者問之、『是何等。名爲何。當與幾歳。』往者曰、『男也。名爲奴。當與十五歳。後應以何死。』答曰、『應以兵死。』仲擧告其家曰、『吾能相。此兒當以兵死。』父母驚之、寸刃不使得執也。至年十五、有置鑿於梁上者、其末出。奴以爲木也、自下鉤之。鑿從梁落、陷腦而死。後仲擧爲豫章太守、故遣吏往餉之申家、并問奴所在。其家以此具告仲擧。仲擧歎、A『此謂命矣。』B注云、「幽明録同。」與廣記所引者小異。〉［A「歎」下、古小説鉤沈有「曰」字、今據御覽刪。　B「矣」、古小説鉤沈・鮑崇城本作「也」。］

【注釈】　**陳仲擧**　後漢の陳蕃（？―一六八）。仲擧は字。『世説新語』徳行篇に「陳仲擧、言爲士則、行爲世範。登車攬轡、有澄清天下之志。」（陳仲擧、言は士の則たり、行ひは世の範たり。車に登り轡を攬りて、天下を澄清するの志有り）と記されているように、後漢末の清流士人で、太尉、太傅となり宦官追放をはかったが、霊帝の建寧元年（一六八）に殺された。七十余歳だった。『後漢書』巻六六に伝がある。　**微時**　身分や地位が低かったとき。仕官する前。『史記』呂后本紀に「呂太后者、高祖微時妃也。」（呂太后は、高祖微なりし時の妃なり）とある。　**黄申**　生没年、事跡とも未詳。　**夜三更**　真夜中。午前0時の前後二時間ぐらいをいう。　**久許**　しばらくして。「許」は「～ばかり」という程度を表す語。『裴子語林』（『世説新語』方正篇注等引、『古小説鉤沈』本第七五話）の王平子（王澄）が王敦に殺される話に、「平子手引大將軍帯絶、與力士鬬甚苦、乃得上屋。上久許而死。」（平子手づから大將軍の帯を引きて絶ち、力士と鬬ふこと甚だ苦りにして、乃ち屋に上るを得。上りて久許しくして死す）とある。『漢語大詞典』は「稍久」と解し、『海内十洲記』聚窟洲・『抱朴子』対俗篇と『幽明録』のこの話を用例とする。　**若爲死**　どのようにして死ぬのか。「若爲」は「若何」（いかん）と同じ。　**默志**　黙って記憶する。「默識」（『論語』述而篇に「默而識之」とある）、「默記」（『文選』巻四五班固「答賓戯」に「潛神默記」とある）と同義と思われる。　**豫章太守**　豫章郡の長官。豫章郡は今の江西省南

昌市を中心とした地域。

【訓読】　陳仲擧 微なりし時、嘗て行きて主人黄申の家に宿る。申の婦 夜 産むも、仲擧 知らず。夜三更に、門を扣く者有り。久許しくして、裏に人の應ずる有るを聞くに云ふ、「門の裏に貴人有りて、前むべからず。宜しく後門より往くべし」と。俄に聞く、往く者還り、門内の者之に問ふ、「何なる兒を見るか。名は何ぞ。當に幾歳なるべきか」と。還る者云ふ、「是れ男兒にして、名は阿奴なり。當に十五歳なるべし」と。又問ひて曰く、「後當に若爲にして死すべきか」と。答へて曰く、「人の爲に屋を作り、地に落ちて死す」と。仲擧此を聞きて、之を默志す。後十五年、豫章太守と爲り、吏を遣りて往きて昔兒の阿奴の所在を問はしむ。家云ふ、「東家の屋を作るを助け、棟より墮ちて死せり」と。仲擧 後 果して大いに貴し。

【訳文】　陳仲挙が仕官する前、ある時黄申の家に行って泊まった。黄申の妻が夜にお産をしたが、仲挙は知らなかった。真夜中に、門を叩く者がいた。しばらくすると中からそれに応答する人がいて、「門内に貴い人がおられるので、この門からは入れません。裏側の門から入った方がいいですよ」と言うのが聞こえた。するとまもなく、中に入った者が帰ってきて、門内の者が、「どのような子どもを見ましたか。名前は何といいますか。何歳まで生きられますか」と尋ねるのを聞いた。中から帰ってきた者は、「男の子で、名前は阿奴だ。十五歳の寿命だ」と言った。また門内の者が、「どのようにして死ぬことになるのですか」と尋ねると、「他人のために家を家を造り、地面に落ちて死ぬ」と答えた。仲挙はこの話を聞いて、黙って覚えておいた。十五年後に、豫章太守となり、役人を派遣して昔の阿奴の所在を尋ねさせた。その家の者は、「東の家を造るのを手伝っていて、屋根の上から落ちて亡くなりました」と言った。仲挙は果してのちに大いに貴い人になった。

【補説】　この話は、魯迅の校記に指摘されているように、『御覽』巻三六一・七六三引『搜神記』（二十巻本『搜神記』巻一九・第四四八話）にも見える。文章にかなり異同があるほか、『搜神記』では陳蕃が運命だと歎じて終わっているのに対し、『幽明録』では陳蕃が貴人となる予兆譚に変えられている。『古今類事』は「仲擧貴人」と題してこの話を載せ、後に、「嗚呼、仲擧之貴與阿奴之死、固有定數。而名亦非由人乎。」（嗚呼、仲擧の貴と阿奴の死とは、固より定數有り。而して名も亦人に由るに非ざるか）という評が付されている。

『魏志』華歆傳注・『御覽』三六一、四六七引『列異伝』（『古小説鉤沈』本第二二話。『搜神後記』巻三第三七話「華歆當公」も同じ）にある華歆（一五六―二三一。魏文帝が即位した黄初元年に司徒となる）の話、

華歆爲諸生時嘗宿人門外。主人婦夜産。有頃、兩吏

詣門、便辟易卻、相謂曰、「公在此。」躊躇良久、一吏曰、「籍當定。奈何得住。」乃前歆拜、相將入。出竝行、共語曰、「當與幾歳。」一人曰、「當三歳。」天明、歆去。後欲驗其事、至三歳、故往問兒消息、果已死。歆乃自知當爲公、喜曰、「我固當公。」後果爲太尉。（華歆 諸生たりし時、嘗て人の門外に宿る。主人の婦 夜産む。頃く有りて、兩吏 門に詣り、便ち辟易し却きて、相謂ひて曰く、「公 此に在り」と。躊躇すること良久しくして、一吏曰く、「籍當に定むべし。奈何ぞ住まるを得ん」と。乃ち前みて歆に向ひて拜し、相將きて入る。出でて竝び行き、共に語りて曰く、「當に幾歳を與ふべきか」と。一人曰く、「當に三歳なるべし」と。天明にして、歆去る。後 其の事を驗せんと欲し、三歳に至り、故に往きて兒の消息を問ふに、果して已に死せり。歆乃ち自ら當に公と爲るべきを知り、喜びて曰く、「我固より當に公たるべし」と。後果して太尉と爲る。）

も同じである。『魏志』裴松之注に、『列異伝』を引いた後、「臣松之按晉陽春説魏舒少時寄宿事、亦如之。以爲理無二人俱有此事、將由傳者不同。今寧信列異。」（臣松之按んずるに晉陽春に魏舒少き時寄宿せし事を説くも、亦之くの如し。以爲へらく理として二人俱に此の事有る無し、將た傳ふる者に由りて同じからざるか。今寧ろ列異を信ず）と言っており、史書である『晉陽春』にも同様のことが記されていて、当時の史官がこのような怪異を伝えていたことがわかる。『搜神記』巻九第二四二話「魏舒」も同様の話である。

42 隴西秦嘉、字士會、雋秀之士①。婦曰徐淑、亦以才美流譽。桓帝時、嘉爲曹掾赴洛。淑歸寧于家②、晝臥、流涕覆面。婓怪問之、云、「適見嘉自説、往津鄉亭病亡。二客俱留。一客守喪、一客賫書還③、日中當至。」舉家大驚。書至、事事如夢。〔御覽四百〕※鄭晩晴輯注本一二〇頁

【校異】①「雋」、古小説鉤沈作「偊」、鮑崇城本作「儁」、今據御覽改。「雋」俗作「隽」、龍龕手鏡云、〈俊〉、〈偊〉或作、〈儁〉正。」②「于」、古小説鉤沈作「於」、今據御覽・鮑崇城本改。③「賫」、古小説鉤沈作「齎」、今據御覽・鮑崇城本改。正字通云、「〈齎〉、俗作〈賫〉。」

【注釈】 **隴西** 郡名。今の甘粛省臨洮県を中心とした地域。 **秦嘉** 生没年未詳。後漢の順帝から桓帝（一二六～一六七）の頃の人、桓帝の時に洛陽に行き、黄門郎となり、数年後に病没した。『藝文類聚』『玉臺新詠』などに、妻の徐淑との間の書簡、贈答詩が残されている。『隋書』經籍志四に「梁又有婦人後漢黄門郎秦嘉妻徐淑集一卷」とあり、妻の徐淑の集が伝えられていたことがわかる。 **儁秀之士** すぐれた人物。「雋」は「俊」「

僞」と同じ。　**以才美流譽**　才能のすばらしさで名を知られていた。「才美」は才覚の優れていること。『論語』泰伯篇に「如有周公之才之美、使驕且吝、其餘不足觀也已。」（如し周公の才の美有りとも、驕りて且つ吝かならしめば、其の餘は觀るに足らざるのみ）とある。「流譽」は評判をとること。『史記』淮南衡山列傳（淮南王安）に「亦欲以行陰德拊循百姓、流譽天下。」（亦陰德を行ひ百姓を拊循し、譽を天下に流さんと欲す）とある。

桓帝　後漢の皇帝。一四七―一六七在位。　**爲曹掾赴洛**　郡の役人として洛陽に使いした。「曹掾」は下役人の意。秦嘉の「與妻書」（『藝文類聚』巻三二）に「當給郡使」（當に郡使に給すべし）という。　**歸寧**　里帰りすること。『毛詩』周南葛覃に「歸寧父母」（父母に歸寧せん）とある。　**婣**　兄嫁。「嫂」「娒」と同じ。『爾雅』釋親「女子謂兄之妻爲嫂」釋文に「〈娒〉、素早反、本今作〈嫂〉。」、『正字通』に「〈婣〉、同〈娒〉。」、『集韻』に「〈娒〉、或从〈叟〉。俗从〈更〉、非是。」という。　**津鄉亭**　津鄉は江陵県にある地名（『後漢書』巻一七岑彭傳注には「津鄉、縣名、所謂江津也。東觀記曰、津鄉當荊・楊之咽喉。」というが、『後漢書』郡國志四「荊州・南郡」に「江陵有津鄉。」と記すように、県名ではない。『後漢書集解』にも「惠棟曰、續漢志南郡江陵縣有津鄉。津鄉、鄉名、非縣名也。」という。）で、後漢の岑彭が蜀の公孫述と戦う拠点にした（『後漢書』光武帝紀上建武五年、巻一七岑彭傳）ところだが、この話の「津鄉亭」と同じかどうかは不明。　**守喪**　遺体の側を離れずにいる。「喪」は「屍」「尸」と同意（江藍生『魏晉南北朝小説詞語匯釋』）。『後漢書』巻六三李固傳に、李固が誅殺され死体を道路にさらされ、「有敢臨者加其罪」（敢へて臨む者有らば其の罪を加ふ）という命令が出ていたにもかかわらず、李固の弟の子の郭亮が屍を収容したいと乞い、許可されなかったので、「因往臨哭、陳辭於前、遂守喪不去。」（因りて往きて臨み哭し、辭を前に陳べ、遂に喪を守りて去らず）とある。また董班も「亦往哭固、而殉尸不肯去。」（亦往きて固に哭して、尸に殉ひて去るを肯ぜず）と、李固の屍の側を去らなかったため、太后が埋葬することを許したという。『晉書』巻七五荀崧傳にも、「王彌入洛、崧與百官奔于密、未至而母亡。賊追將及、同旅散走、崧被髮從車、守喪號泣。賊至、棄其母尸於地、奪車而去。崧被四創、氣絶、至夜方蘇。葬母於密山。」（王彌洛に入り、崧百官と密に奔り、未だ至らざるに母亡す。賊追ひて將に及ばんとし、同旅散走するも、崧被髮して車に從ひ、喪を守りて號泣す。賊至り、其の母の尸を地に棄て、車を奪ひて去る。崧四創を被り、氣絶し、夜に至りて方めて蘇る。母を密山に葬る）とある。『漢語大詞典』は、『後漢書』李固傳の例を引き、「守喪」を「守服喪事」の意に解するが、用例を見る限り、屍の側を離れない意に解する方が妥当であろう。

【訓読】 隴西の秦嘉、字は士會、雋秀之士なり。婦を徐淑と曰ひ、亦才美を以て譽を流す。桓帝の時、嘉曹掾と爲り洛に赴く。淑 家に歸寧し、晝臥し、流涕し面を覆ふ。婗 怪しみて之を問ふに、云ふ、「適に嘉を見るに自ら説ふ、津郷亭に往きて病亡す。二客俱に留まる。一客 喪を守り、一客 書を賫して還り、日中に當に至るべしと」と。家を擧げて大いに驚く。書至り、事事夢の如し。

【訳文】 隴西の秦嘉は、字を士会といい、俊秀の士だった。妻を徐淑といい、彼女もまたすぐれた才能を持っていて評判だった。桓帝の時、嘉は下役人となり洛陽に赴いた。淑は里帰りし、昼間に横になっていたとき、涙を流して顔を覆った。兄嫁が不思議に思って尋ねると、「今ちょうど嘉を夢に見たところ自ら次のように話しました。『津郷亭に行って病死した。二人の客人が一緒にいた。一人は亡骸の側にいて、一人は手紙を持って家に向かい、昼にはそちらに着くはずだ。』」と言った。家中の者は大変驚いた。手紙が届き、みな夢の通りだった。

【補説】 秦嘉と徐淑の贈答詩と書簡は、秦嘉が洛陽に赴いたときに、徐淑が病気で実家に帰り寝たままの状態で、同行も見送りもできない中で交わされたものとなっている。この話は、秦嘉自身が病身の妻の夢枕に現れて自らの病死を告げるもので、秦嘉と徐淑夫婦の贈答詩から二人の情が夢にまで通い合うことが語られていたのであろう。梁・鍾嶸『詩品』の中品では、秦嘉と徐淑の詩について、「夫妻事既可傷、文亦悽怨なり。」（夫妻の事既に傷むべく、文も亦悽怨なり）と記されている。

43 常山張顥爲梁相①、天新雨後、有鳥如山鵲②、飛翔稍下墜地③。民爭取④、卽化爲一圓石。顥椎破之、得金印⑤。文曰、「忠孝侯印⑥。」顥表上聞⑦、藏之秘府。

顥漢靈帝時至太尉。〔類聚四十六。初學記二十七〕※鄭晩晴輯注本三七頁

【校異】 ①校記云、「初學記引作南川。」今初學記作「常山」。②類聚無「山」字。校記云、「初學記引有山字。」③「墜」、初學記作「墮」。④「民」、初學記作「人」。⑤「金」上、初學記有「一」字。⑥校記云、「已上初學記二十七亦引。」⑦初學記無以下十六字。

【注釈】 **常山** 郡名。今の河北省元氏県を中心とした地域。 **張顥** 生没年未詳。後漢・霊帝の光和元年（一七八）に太常から太尉となり、九月に辞めている（『後漢書』巻八霊帝紀）。 **梁相** 梁国の宰相。梁は後漢の下邑（今の安徽省碭山県）を中心とした侯国。 **山鵲** おながどり。『爾雅』釋鳥「鴛、山鵲。」郭璞注に「似鵲而有文彩、長尾、觜脚赤。」（鵲に似て文彩、長尾有り、觜脚赤し）とある。 **金印** 『後漢書』巻八四列女傳曹世叔妻「猥賜金紫」注に「漢官儀曰、二千石金印紫綬也。」というように、高官の賜わるものだった。 **忠**

孝侯印　『搜神記』では、堯舜のときにこの官職があったという話になっている。　**表上聞**　上表して天子に奏聞する。『韓非子』五蠹篇に「令尹誅而楚姦不上聞。」（令尹誅して楚姦　上聞せず）とある。　**秘府**　宮中の書庫。『漢書』巻三〇藝文志序に「於是建藏書之策、置寫書之官、下及諸子傳説、皆充祕府。」（是に於いて藏書の策を建て、寫書の官を置き、下諸子傳説に及ぶまで、皆祕府に充つ）とあり、如淳注引劉歆『七略』に「外則有太常・太史・博士之藏、内則有延閣・廣内・祕室之府。」（外は則ち太常・太史・博士の藏有り、内は則ち延閣・廣内・祕室の府有り）という。　**漢靈帝**　後漢の靈帝劉宏（一六八―一八九在位）。　**太尉**　武事を主管し、司徒・司空とともに三公と称し、臣下の最高位。後漢・光武帝のときに三公の首とされる（『後漢書』百官志一）。

【訓読】　常山の張顥　梁の相たりしとき、天新たに雨ふりし後、鳥の山鵲の如き有り、飛翔して稍く下りて地に墜つ。民爭ひてれば、卽ち化して一圓石と爲る。顥椎もて之を破り、金印を得。文に曰く、「忠孝侯印」と。顥　表して上聞し、之を秘府に藏す。顥　漢の靈帝の時に太尉に至る。

【訳文】　常山の張顥が梁国の宰相だったころ、雨があがったばかりの時に、おながどりのような鳥が、飛翔して次第に下ってきて地面に墜ちた。民が競って捕まえようとしたら、一つの丸い石に変わった。顥は椎でたたき割って、金印を得た。金印には、「忠孝侯印」と記されていた。顥は上表して奏聞し、宮中の書庫に収めた。顥は漢の靈帝の時に太尉になった。

【補説】　第四一話と同様の、張顥が出世する予兆譚である。鳥が物に変化するのは、『幽明録』第三五話（初學記巻二七等引）の鳥が金の帯留めに化して子孫が繁栄する話と同じである。

『搜神記』では、巻九の第二三七～二四二話の六話が同様な吉兆譚となっていて、この話は、その第二三九話（『類聚』巻九〇、『後漢書』靈帝紀注、『初學記』巻五・二六、『御覽』巻五一・二〇一・九二一、『事類賦注』巻一七・一九引『搜神記』。『廣記』巻四六一引、未出書名）である。また、『博物志』巻七にも収録されている。両書とも「藏之祕府」（『博物志』「祕府」作「官庫」）のあとに、

後議郎汝南樊衡夷上言、「堯舜時、舊有此官。今天降印。宜可復置。」（後議郎の汝南の樊衡夷上りて言ふ、「堯舜の時、舊此の官有り。今天印を降す。宜しく復た置くべし」と。）へ『博物志』作「後議郎汝南樊行夷校書東觀、表上言、堯舜之時、舊有此官。今天降印、宜可復置。」〉

という文がある。

44　馮貴、前漢漢桓帝貴人也。美艶絶雙。死後卅餘年、群賊發其塚、見貴人顔色如故。賊遂競釁之①、鬪爭相煞而死。〔琱玉集十四〕※鄭晩晴輯注本二九頁

【校異】①「競」、古小説鉤沈作「競」、今據琱玉集（古逸叢書本）改。廣韻云、「〈競〉、〈競〉俗。」

【注釈】　**馮貴**　馮貴人。貴人は皇后に次ぐ地位で光武帝の時に置かれた（『後漢書』巻一〇上皇后紀序）。『後漢書』輿服志下では、後宮の女性の地位を、太皇太后・皇太后・皇后・貴人・公主の順に配列している。　**前漢漢桓帝**　先の漢の桓帝。原文の「漢」の一字は衍字。漢桓帝は、後漢の桓帝劉志（一四七―一六七在位）。　**絶雙**　並ぶものがない。無双、絶群、絶倫と同意。　**死後卅餘年**　『列異伝』『搜神記』は「七十餘年」に、『法苑珠林』巻九七・『太平御覽』巻五五九引『搜神記』は「百歳」に作る。『後漢書』巻六五段熲伝に、段熲が馮貴人の墓が盗掘された責任をとって河南尹から諫議大夫に左遷されたことが記されている。段熲の事跡から考えて、この事件は霊帝の建寧三年（一七〇）から熹平元年（一七二）の間に起きたことがわかる。従って小説のこの部分の記載はいずれも史実を曲げた誇張表現である。

【訓読】　馮貴は、前の漢の桓帝の貴人なり。美艶なること雙を絶つ。死後卅餘年にして、群賊其の塚を發き、貴人の顔色故の如きなるを見る。賊遂に競ひて之を釁さんとし、鬪爭して相煞して死す。

【訳文】　馮貴人は、先の漢の桓帝の貴人である。その美しさは並ぶものがないほどであった。死後三十年余りたって、盗賊がその墓をあばいたところ、馮貴人の顔色は生前のままであった。そこで賊たちは競って貴人を犯そうと、争って互いに殺しあって死んだ。

【補説】　この話は、『類聚』巻三五引『列異傳』（『古小説鉤沈』第一八話）に、

漢桓帝馮夫人病亡。靈帝時、有賊盗發冢。七十餘年、顔色如故、但小冷。共姦通之、至鬪爭相殺。竇太后家被誅、欲以馮夫人配食。下邳陳公達議、『以貴人雖是先所幸、尸體穢汚、不宜配至尊。』乃以竇太后配食。（漢の桓帝の馮夫人病みて亡す。靈帝の時、賊有り冢を盗發す。七十餘年なるも、顔色故のごとく、但だ小しく冷たし。共に之を姦通し、鬪爭して相い殺すに至る。竇太后の家誅を被り、馮夫人を以て配食せんと欲す。下邳の陳公達議す、「以へらく、貴人は是れ先の幸する所と雖ども、尸体穢汚し、宜しく至尊に配すべからずと」と。乃ち竇太后を以て配食す。）

と記されている。『搜神記』巻一五第三七三話（大蔵經本『法苑珠林』巻九七、『御覽』巻五五九引『搜神記』）も、『列異傳』とほぼ同文である。

この事件は史書にも記載があり、『後漢書』巻五六陳球傳に、熹平元年竇太后が亡くなった時、宦官が竇氏を

嫌い馮貴人を桓帝と合わせて祀ろうとしたのに対して、廷尉の陳球が「馮貴人冢墓被發、骸骨暴露、與賊併尸、魂霊汚染。且無功於國。何宜上配至尊。」（馮貴人は冢墓發かれ、骸骨暴露し、賊と尸を併べ、魂霊汚染す。且つ國に功無し。何ぞ宜しく至尊に上配せんや）と建議したことが見える。また『後漢書』巻六五段熲傳にも「有盗發馮貴人冢、坐左轉諫議大夫。」（盗の馮貴人の冢を發く有り、坐して諫議大夫に左轉せらる）と記されている。『後漢書』に記載されているような歴史事実が誇張されて語られたものであろう。

45　句章人至東野還、暮不至門①。見路傍有小屋燈火②、因投寄宿③。有一小女④、不欲與丈夫共宿⑤、呼鄰家止宿⑥。女自伴、夜共彈琴箜篌。至曉、此人謝去、問其姓字、女不荅、彈絃而歌曰⑦、「連綿葛上藤⑧、一援復一絙⑨。欲知我姓名⑩、姓陳名阿登。」（御覽五百七十三。書鈔一百六。⑪）※鄭晩晴輯注本一三七頁

【校異】　①「至」、書鈔作「及」。②「傍」、書鈔作「旁」。「燈」、御覽作「灯」、魯迅據鮑崇城本。書鈔無「燈火」二字。③「宿」下、御覽有「止宿」二字、今從鮑崇城本・書鈔。④「小女」、書鈔作「女子」。⑤「宿」、古小説鉤沈作「處」、今據御覽・鮑崇城本改。書鈔無此句以下三十四字。⑥御覽無「止宿」二字、魯迅據鮑崇城本。⑦「彈」上、書鈔有「夜」字。「絃」上、書鈔有「琴」字。⑧「綿」、鮑崇城本作「緜」。「藤」、鮑崇城本作「籐」。⑨「援」、御覽作「緩」、魯迅據鮑崇城本・書鈔。⑩「知」、書鈔作「問」。校記云、「書鈔引作問。」⑪校記云、「案廣記三百十六引靈怪集與此同。末有云、明至東郭外、有賣食母在肆中、此人寄坐、因説昨所見。母驚曰、此是我女、近亡、葬於郭外爾。」搜神後記六與靈怪集同。

【注釈】　**句章人**　句章は県名（『漢書』巻二八上地理志上）。今の浙江省慈溪市。『搜神後記』巻六は、「漢時、會稽句章人」に作る。　**東野**　地名ではなく、東の郊外の意であろう。　**一援復一絙**　葛の蔓を引くとまた次の蔓がつながっているという意。『搜神後記』は「援」を「緩」に作る。緩はたれひもの意。「絙」はくみひも。

【訓読】　句章の人　東野に至りて還り、暮に門に至らず。路傍に小屋の燈火有るを見て、因りて投じて寄宿す。一小女有り、丈夫と共に宿るを欲せず、鄰家を呼びて止宿せしむ。女自ら伴ひ、夜共に琴と箜篌を彈ず。曉に至り、此の人謝して去らんとし、其の姓字を問ふも、女荅へず、絃を彈じて歌ひて曰く、「連綿たる葛の上の藤、一たび援けば復た一絙。我が姓名を知らんと欲す、姓は陳　名は阿登なり」と。

【訳文】　句章の人が東の郊外に行き帰ろうとし、日が暮れても町の門まで到着できなかった。路傍に小屋の灯火を見つけたので、身を寄せて宿を借りた。そこには一

人の少女がいたが、男性と一緒に一夜を過ごすことをいやがり、鄰家の人を呼んで泊まらせた。少女は自らつれそい、夜一緒に琴と箜篌を弾いた。明け方になり、この人がお礼を言って出かけようとし、その姓名を聞いたが、少女は答えずに、絃をつま弾いて、「連綿と続く葛の上の藤、蔓を引くとまた蔓がつながっている。私の姓名を知りたいとのこと、姓は陳 名は阿登と申します」と歌った。

【補説】 この話は、『搜神後記』巻六第五八話「陳阿登」（四部本『法苑珠林』巻五九、『御覽』巻八八四引『搜神後記』）にも収録されていて、少女の歌の後に、

明至東郭外、有賣食母在肆中。此人寄坐、因説昨所見。母聞阿登、驚曰、「此是我女。近亡、葬於郭外。」

（明 東郭の外に至るに、食を賣る母の肆中に在る有り。此の人寄りて坐し、因りて昨の見し所を説く。母 阿登と聞き、驚きて曰く、「此れは是れ我が女（むすめ）なり。近ごろ亡し、郭外に葬る」と）

と記されている。『太平廣記』巻三一六「鬼」一「陳阿登」（出『靈怪集』）も同じである。これによると、娘のところで一晩を過ごし、翌日、泊まったところは墓の中であり、相手したのは亡くなって埋葬された娘だったという「鬼女」との交際を語る幽婚譚（冥婚譚）の系譜に属する話ということになる。

46 漢時、太山黄原①、平旦開門、忽有一青犬、在門外伏②、守備如家養。原紲犬、隨鄰里獵。日垂夕、見一鹿、便放犬。犬行甚遅、原絶力逐、終不及③。行數里、至一穴。入百餘歩、忽有平衢、槐柳列植、行牆迴帀④。

原隨犬入門、列房櫳戸可有數十間⑤。皆女子、姿容妍媚、衣裳鮮麗。或撫琴瑟、或執博碁⑥。

至北閤⑦、有三間屋、二人侍直⑧、若有所伺。見原、相視而笑⑧、「此青犬所致妙音壻也⑨。」一人留、一人入閤。須臾、有四婢出、稱「太眞夫人白黄郎」、「有一女、年已弱笄、冥數應爲君婦。」既碁、引原入内。内有南向堂⑩、堂前有池、池中有臺、臺四角有徑尺穴、穴中有光、映帷席⑪。妙音容色婉妙、侍婢亦美。交禮既畢、宴寢如舊⑫。

經數日、原欲暫還報家⑬。妙音曰、「人神道異⑭、本非久勢。」至明日、解珮分袂⑮、臨階涕泗⑯。後會無期⑰、深加愛敬、「若能相思、至三月旦、可修齋潔⑮。」

四婢送出門、半日至家。情念恍忽⑲。毎至其期、常見空中有輧車髣髴若飛。（珠林三十一（大正新脩大藏經本）。四部叢刊初編本珠林四十一、廣記二百九十二「神」二「黄原」引珠林）」※鄭晩晴輯注本一四頁

【校異】 ①「太」、廣記引作「泰」。②「在」、四部本作「扞」。③大正藏無「終」字、中華大藏經有。④廣記引作「垣墻廻匝」。「帀」、大正藏作「匝」。「廻」、中華大藏經作「廻」。⑤廣記引無「櫳戸」二字。⑥「碁」、

大正蔵・廣記引作「棊」。⑦「閤」、古小説鉤沈作「閣」、今據珠林各本改。⑧「直」、廣記引作「値」。⑧「笑」下、廣記引有「云」字。⑨「致」上、廣記引有「引」字。⑩廣記引無「内」字。⑪「映」、廣記引作「照暎」二字。「帷」、中華大藏經作「惟」。⑫「宴」、廣記引作「晏」。「寢」、中華大藏經作「寖」。⑬「暫」、中華大藏經作「暫」。⑭「道異」、古小説鉤沈作「異道」、今據珠林各本改。⑮「珮」、廣記引作「佩」。⑯「涕」、大正藏作「洟」。⑰「後」、中華大藏經作「終」。⑱「修」、中華大藏經作「脩」。「潔」、廣記引作「戒」。⑲「忽」、四部本・中華大藏經・廣記引並作「惚」。

【注釈】　**太山**　郡の名。泰山郡のこと。今の山東省泰安市を中心とした地域。　**黄原**　生没年事跡とも未詳。　**青犬**　黒い犬。黒毛の牛を青牛というのと同じ。　**家養**　家で飼われているという意であろう。李継芬・韓海明選訳『漢魏六朝小説選訳（下）』（上海古籍出版社、一九八八）は「自己家里养的」と訳す。　**絶力**　力を尽くす。『荘子』漁父篇に「疾走不休、絶力而死。」（疾走して休まず、力を絶くして死す）とある。　**平衢**　平坦で大きな道。「衢」は四方に通じる大道。阮籍「清思賦」に「滌平衢之大夷」（平衢の大夷を滌ふ）とある。　**行牆迴帀**　家に沿って垣根が巡らしてあることをいうのであろう。鄭晩晴注、沈偉方・夏啓良選注（『漢魏六朝小説選』、中州書画社、一九八二）では、「行牆」を「囲墻」と解する。「迴帀」はぐるりと巡る意、沈偉方・夏啓良選注は「環繞」と解する。　**列房櫳戸**　連なる部屋と窓や扉。「櫳」はれんじ窓。　**可有數十間**　数十ばかりの部屋がある。『漢語大詞典』は、「可」を「大約」の意に解し、東晋・法顕「佛國記」の「其國王奉法、可有四千餘僧、悉小乗學。」を例に挙げる。『古代漢語虚詞詞典』（商務印書館、一九九九）にも「用于数词、动词或形容词前、表示约计。可译为大概、大约等。」と解して、『広記』巻二四八（「詼諧」四）「侯白」（出『啓顔録』）の「今有一深坑、可有數百尺。」を例に挙げる。『漢魏六朝小説選訳（下）』も、「大约有几十间」と訳す。ここでは「ほぼ」と訓じておく。「間」は部屋の数を表す量詞。『文選』巻一一王延寿「魯靈光殿賦」に「三間四表」とある。　**妍媚**　艶やかで美しい。邊讓「章華臺賦」（『後漢書』巻八〇下文苑傳下邊讓傳引）に「妍媚遞進、巧弄相加。」（妍媚遞に進み、巧弄相加ふ）、謝靈運「江妃賦」（『類聚』巻七九引）に「盡古來之妍媚」（古來の妍媚を盡す）とあり、ともに神女の艶やかさをいう。　**博碁**　双六や碁、古代の遊戯。『後漢書』巻三四梁冀傳に見える黒白の石を使った「彈棊」「六博」のこと。　**侍直**　宮廷内で命を待つこと。『南史』巻一四劉劭傳に「蕭斌執刀侍直。」（蕭斌　刀を執り侍直す）とある。　**太眞夫人**　西王母の娘。『広記』巻五七「女仙二」に『神仙伝』から採録された話がある。　**弱笄**　十五歳の女子。

女子の成人になる年齢、笄年。他の用例を見ないが、男子の二十歳を弱冠というのに倣ったものと思われる。

冥數　人智では知り得ない運命。『文選』巻三一江淹「雜體詩」（劉太尉傷亂）「治亂惟冥數」（治亂は惟れ冥數なり）とあり、李善注に「冥、幽冥也。數、歴數也。孫子兵法曰、治亂數也。范曄後漢書烏丸論曰、天之冥數、以至於是乎。」（冥は、幽冥なり。數は、歴數なり。孫子兵法に曰く、治亂は數なり。范曄後漢書烏丸論に曰く、天の冥數、以て是に至るか）という。　**婉妙**　艶やかで美しい。『漢魏六朝小説選訳（下）』は「美丽非凡」と訳す。　**交禮**　結婚の儀式。『世説新語』賢媛篇に「許允婦是阮衞尉女、德如妹。奇丑。交禮竟、允無復入理、家人深以爲憂。」（許允の婦は是れ阮衞尉の女、德如の妹なり。奇だ醜し。交禮し竟るも、允復た入るの理無く、家人深く以て憂ひと爲す）とある。　**宴寢如舊**　二人の仲の良さは昔なじみのようだった。「宴寢」は「燕寢」と同意で、くつろぐ部屋の意。鄭晩晴注には「生活在一起象早就相识一样」と解する。　**本非久勢**　もともと長続きするものではない。「久勢」はその状況を長く維持することをいうのであろう。『漢魏六朝小説選訳（下）』は「本来就不是长久之计」と訳す。　**解珮分袂**　身につけていた佩玉を贈り別れる。『列仙傳』江妃二女に「遂解佩與交甫。」（遂に佩を解きて交甫に與ふ）、『文選』巻二五謝惠連「西陵遇風獻康樂」詩に「分袂澄湖陰」（袂を澄湖の陰に分つ）とある。　**齋潔**　斎戒沐浴して心身を清めること。『博物志』巻六に「筮、必沐浴齋潔燒香。」（筮には、必ず沐浴齋潔燒香す）とある。

軿車　貴族の婦女が乗る幕を付けた車。『後漢書』輿服志上に見える。

【訓読】　漢の時、太山の黄原、平旦に門を開くに、忽ち一青犬有り、門外に在りて伏せ、守備すること家養の如し。原 犬を紲ぎ、鄰里の獵に隨ふ。日 夕べに 垂とし、一鹿を見て、便ち犬を放つ。犬行くこと甚だ遅く、原 力を絶くして逐ふも、終に及ばず。行くこと數里にして、一穴に至る。入ること百餘歩にして、忽ち平衢有り、槐柳列植し、行牆迴帀す。

原 犬に隨ひて門に入るに、列房櫳戸可數十間有り。皆女子にして、姿容は妍媚、衣裳は鮮麗なり。或いは琴瑟を撫し、或いは博碁を執る。

北閤に至るに、三間の屋有り、二人侍直し、伺ふ所有るが若し。原を見て、相視みて笑ひ、「此れ青犬の致す所の妙音の壻なり」といふ。一人留まり、一人閤に入る。須臾にして、四婢の出づる有りて、「太眞夫人 黄郎に白す」と稱し、「一女有り、年已に弱笄にして、冥數 應に君が婦と爲るべし」といふ。既に暮れ、原を引きて内に入る。内に南向の堂有り、堂前に池有り、池中に臺有り、臺の四角に徑尺の穴有り、穴中に光有り、帷席を映らす。妙音 容色婉妙にして、侍婢も亦美なり。交禮既に畢り、

宴寢すること舊の如し。

數日を經て、原 暫く還りて家に報ぜんと欲す。妙音曰く、「人神 道異なり、本より久勢に非ず」と。明日に至り、珮を解き袂を分かち、階に臨みて涕泗す。後に會ふに期無ければ、深く愛敬を加へ、「若し能く相思はば、三月の旦に至り、齋潔を修むべし」といふ。

四婢送りて門より出で、半日にして家に至る。情念恍忽たり。其の期に至る毎に、常に空中に輧車の髣髴として飛ぶが若き有るを見る。

【訳文】 漢の時に、泰山郡の黄原が、夜明けに門を開けたところ、一匹の黒い犬が、門の外に伏せて、飼い犬のように番をしていた。黄原は犬を紐につないで、近所の人と狩りに出かけた。日が暮れようとする頃に、一頭の鹿を見つけ、すぐに犬を放した。犬の走り方は大変遅いように見えたが、黄原が全力で追いかけても、どうしても追いつけなかった。数里ほど行くと、一つの穴に着いた。百歩余り中に入ると、突然平らな道が現れ、槐と柳の並木があり、家の周りには垣根がめぐらされていた。

黄原が犬について門を入ると、数十ばかりの部屋があり窓や扉を連ねていた。部屋には皆女がいて、姿形は艶やかで美しく、衣裳も鮮やかで綺麗だった。ある者は琴を奏で、ある者は双六や碁に興じていた。

北の御殿に着くと、三つの部屋があり、二人の侍女がいて、こちらの様子を伺っているようだった。黄原を見ると、顔を見合わせて笑いながら、「この方が黒犬が連れてきた妙音さんのお婿さんよ」と言った。一人はそこに残り、一人は御殿の奥に入っていった。しばらくすると、四人の女中が出てきて、「太眞夫人が黄郎に申し上げます」と称して、「一人の娘がいて、すでに成人を迎え、あなたの妻になる定めとなっています」と言った。日が暮れると、黄原を連れて奥に入った。中には南向きの座敷があり、座敷の前には池があり、池の中には台があり、台の四隅には直径一尺の穴があり、穴からは光が差し込んで、帳をめぐらした室内を照らしていた。妙音は顔かたちが艶やかで美しく、侍女も美しかった。婚礼の儀式が終わると、二人の仲の良さは昔なじみのようだった。

数日たって、黄原はちょっと家に帰って報告したいと話した。すると妙音は、「人と神では世界が違いますから、もともと長続きするご縁ではありません」と言った。翌日になり、妙音は身につけていた佩玉を黄原に贈り別れを告げ、階段のところまで見送り涙にくれた。この後会うあてもないので、深く愛情をこめて、「もし私のことを思ってくださるのならば、三月一日になったら、斎戒沐浴してくださいね」と言った。

四人の女中に見送られて門から出ると、半日で家に帰った。黄原は気持ちがうっとりしたままであった。約束の日になると、いつも空中に高貴な女性が乗る車が飛ん

でいるのがぼんやりと見えた。

【補説】　これは、第三八話の劉晨・阮肇が天台の二女の婿として迎えられる話と同様の神女（仙女）との結婚譚であるが、妙音の母が西王母の娘の太真夫人という設定になっていて、より神仙色が強まっている。神女との結婚譚には、大きく分けて、神女の方から尋ねてくる話と、何かに導かれて神女に迎えられる話の二つのパターンがある。前者は『搜神記』巻一第三〇話「杜蘭香」、第三一話「成公智瓊」などであり、『幽明録』の劉晨・阮肇の話、妙音の話が後者に属する。両者ともに異界との交流であるので、「成公智瓊」のように禁忌を犯して破局を迎えることに典型的に見られる異類婚姻譚の要素を持つが、後者には「桃花源記」のような異郷訪問譚の要素が加わっていることや、女人国を思わせる女だけの世界が描かれているところに特徴がある。

この話に、黄原が招き入れられた奥座敷の描写に、「引原入内。内有南向堂、堂前有池、池中有臺、臺四角有徑尺穴、穴中有光」という頂真表現が見られるのは、志怪の文章としては興味深いものがある。

なお、『龍威秘書』・『唐人説薈』（『唐代叢書』）所収「神女傳」（唐・孫頠輯）に「太眞夫人」と題して収録されている作品は、この『幽明録』の話と同文であり、李劍國『唐前志怪小説輯釋』に、「神女傳係明人僞纂、妄加撰名以實其書耳。」と指摘する。また、明・馮夢龍の編と言われる『情史』巻一九情疑類にも「妙音」と題して収録されているが、これも『幽明録』と同文である。

（續）